

遊びの精神史のための覚え書き

・・・日本文化におけるホモ・ルーデンスの探求（奈良・平安篇）

藺 田 碩 哉

生活福祉学科教授

日本人の精神生活の中で「遊び的なるもの」がどんな位置を占めて来たのかを考えてみたいというのがこの小論の目的である。

神楽歌に、

瑞垣の神の御代よりささの葉を手ぶさに取りて遊びけらしも

（神楽歌 一五）

とあるように、いにしえの「神の御代」からわれわれは「遊び」を神と人との交流の場と見なしてきた。神楽は「神遊び」とも言われるが、その想像上の起源を神々の歌や踊りの集いに置いている。八百万の神々は庭火をたき、榊やささの葉を手にとって夜もすがら神遊びをされ、この世の人間たちの営みを寿がれたのである。歌や踊りによる陶醉によって日常から心身を解放して別世界を体験し、命の甦りを果たすこと、われわれの先祖たちはそれを「遊び」という言葉で表現した。遊びは神をまつる行事に始まり、

音楽や舞踊と繋がり、さらには宴会や狩猟や自然との交感など、広範な活動を包含していく。

一、万葉集の中の「遊び」

『万葉集』の中で「遊び」の語を用いた歌を当たってみると、そこには古代人が抱いた遊びのイメージが多彩に展開されていることを感じさせるさまざまな歌が見いだされる。万葉人にとって遊びはまず歌や踊りを伴う楽しいうたげ^{ウタゲ}宴会であった。

春さらばあはむと思ひし梅の花今日の遊びに相見つるかも

（八三五）

級離^{シガガ}る越の君らと斯くしこそ楊かづらき楽しく遊ばめ

（四〇七一）

現代人の春の宴は桜の花見と決まっているが、古代人の愛でた花は梅であった。また、遠来の友と楊の枝を髪飾りにして楽しむことも宴会の常であったようだ。いずれにしても万葉の宴は自然との交感という要素を色濃く含んでいた。自然の霊力を呼び込んでともに遊ぶことが生きる力のよみがえりをもたらすと考えられていた。その感覚は遙か現代の花見の饗宴にまで引き継がれていると言えよう。

古代の遊びという語には、その後には失われた「狩獵」という意味が存在した。『古事記』の雄略記に「あるとき、天皇遊び出でまして、美和川に至りましたとき」とあるのは狩獵に出かけたのである。また雄略天皇五年の記事に葛城山に狩獵をし、怒り猪に出会う話がある。このとき恐れて木に逃げ登った舎人が歌った歌なるものが掲げられている。

やすみしし わが大君の
遊ばしし 猪の
怒声 畏み
わが逃げ上りし
在丘の上の 榛が枝
あせを

大君が「遊ばし」たのは猪狩りである。大君はふがない舎人

に替わって猪に立ち向かい、みごとにこれを踏み殺して天皇の威勢を示すのである。このような狩りが「遊び」と観念されたのは、獣の命を仕留めることは自然と神とのより深い交流を実現するものと思われたからではないだろうか。そこにはアイヌ民族の熊祭りにも比定さるべき宗教的な意味合いが感じ取れる。遊びとは生のエネルギーを横溢させることであり、遊びにおいて自然と人間の根元的な一体感が感得される。狩りはそうした意味で壮大な宴に他ならなかった。

「世間の術なきものは 年月は流るるごとし」の句で始まる『万葉集』八〇四の有名な長歌がある。若さの移ろい易さを嘆く歌であるが、ここで若さが持つ輝かしい生命力を象徴するのが遊びである。

娘子等が娘子さびすと 唐玉を手本に纏かし 同輩兒らと
手携はりて 遊びけむ時の盛を…
ますらをの壮士さびすと 剣太刀腰に取りはき 獵弓を手握り
り持ちて 赤駒に倭文鞍うち置き はひ乗りて遊びあるきし
世間や常にありける…

乙女たちが手玉にとって遊ぶのは、まさにうら若い娘たちの「時の盛り」であり、若者たちが馬を乗り回して遊ぶのも、人生の絶頂期の光景である。だが、そのような時間は長くは続かないとい

う「嘆き節」が歌の主題だが、ここで遊びは若さそのものとして描かれている。

若さのシンボルとしての遊びは、「率^{アトモ}ひて をとめをとこの往き集ひ かがふ歌垣に」の歌を連想させる（一七五九）。男女が筑波嶺の山に出て歌の掛け合いを楽しみ、男女の自由な交流に及ぶ「かがい」こそは、時の盛りの遊びの頂点ではなかったか。

万葉の遊びのイメージの中で今ひとつ重要と思われるのは「船遊び」である。

…布勢の海に船浮けすゑて 沖へこぎ辺にこぎ見れば

渚にはあぢむら騒ぎ 島廻^ミには木末花咲き…

思ふどち斯くし遊ばむ 今も見るごと (三九九一)

海原に漕ぎ出してゆらゆらと漂いながら、遙かに渚の鳥たちや島々に咲く花を楽しむのも、自然の力を感じ取り、そのなかに包み込まれることを喜ぶ大がかりな遊びであった。古代人にとって、わたつみ⇨海神の支配する海原は、天地のエネルギーを溜め込んだ生命の母体と見えたであろう。船遊びは、頼りない小舟に命を預けて、広大な母なる海に抱かれる、これまた得難い自然との交感の機会であった。

もうひとつつけ加えると、自然の中に住まいする鳥やけものはま

さに遊びを生きているとも言い得る。人間だけでなく動物たちも遊ぶのである。

鴨鳥の遊ぶ此の池に木の葉落ちて浮べる心わが思はなくに

(万七一)

自然との交感・交流は万葉的遊びの原形質だと思われるが、遊びの精神はそこから発してやがて人間的な世界に浸透し、人生を遊びとの連関において感じ取る意識を生み出す。遊びは一つの生き方としても観念されるのである。

世の中の遊びの道にすずしきは酔泣するにあるべくあるらし

(万三四七)

有名な大宰帥^{ダイサイソウ}大伴旅人の「酒を讀むる歌十三首」の一首である。つまらぬことを思い煩うのは止めて（^{シム}験なき物思はずは）、一杯の濁り酒を飲んでいいるほうがマシだという歌を手始めに、酒を飲むことの至上の楽しみを謳い上げている。酒こそは聖^{ヒツジ}であって「極めて貴きもの」であり、「夜光る玉」にも代え難い。世の中には賢者顔して酒を飲まない輩もいるが、その連中の顔を「よく見れば猿にかも似む」。自分はいっそのこと酒壺になりたいくらいだといふ旅人は、酔ってわめいて泣いて憂さを晴らす「泣き上戸」タイ

プの酒飲みである。その背景には、前代には威勢を振った大伴氏の棟梁として、辺境の太宰府長官に追いやられた鬱屈があつたに違いない。「酔泣」という句が十三首中に三首もあり、酔い泣きして感情を解放してすっきりする(すずしき)ことこそ、彼の生きる智恵であり、現実世界に夢を抱けなかつた旅人が切り開いた「遊びの道」であつたと言えよう。

ここで言われる「遊びの道」は徹底して現世的である。十三首中の「今の代にし楽しくあらば来む生には蟲にも鳥にも吾はなりなむ」という言明は、明らかに仏教の転生の思想を反映しているが、後生を願う仏教的心情とはみごとに遠い。さらに「生者つひにも死ぬるものになれば今ある間は楽しくをあらな」というわけで、どうせ死ぬのだから楽しもう、憂きことは酒を飲んで忘れようという快楽主義が旅人風遊び道の極意である。

こうした遊び道の周辺に、遊びを生業とする女性が現れるのは、万葉の昔でも必然であろう。「遊行女婦」と書いて「アソビ」と読ませる例があるが、万葉集四三三二には「遊行女婦 蒲生娘子の歌」が掲げられており、その遊び女はこんな歌を詠んでいる。

雪の島巖に植ゑたるなでしこは千世に咲かぬか君が挿頭カザシに

整った詠みぶりのこの歌は、いかにも職業的な印象を与える。

そつなく出来上がった挨拶歌と言うべきであろう。遊行女婦の遊び道もそれなりの洗練に達していたのである。とは言え、この時代の「遊び」という語は、遊びに関わる女性は意味しても、「女遊び」の遊興そのものを含意してはいない。遊びが職業的な女性との交渉の色彩を強く持つのは、はるか後世のことになる。

二、思想の「原型」と遊びの現在

万葉集に漲る自然的・生命的な遊びのイメージは、いかなる世界観を土台にして生まれたのだろうか。これについては戦後日本のオピニオンリーダーであつた政治学者・丸山真男教授の講義に耳を傾けたい。丸山教授は東大法学部で行われた一九六四年の「日本政治思想史」の講義の冒頭で「思考様式の原型(プロトタイプ)」というコンセプトを打ち出している。「原型とは、社会結合様式および政治的行動様式の原初的形態、ならびに神話・古代説話に現れた思考様式および価値意識(文化)をいう」のである。いわば古代日本人の生活と政治を基盤に生み出された考え方・感じ方であり、日常の行動をリードすべき価値感である。丸山教授の比喩を借りれば「鑄型」であり、この鑄型からその後の思想的伝統が打ち出されて来るのである。われわれが課題としている「遊び」の意識についてもこの鑄型は何ほどの役割を果たしているであろう。

一般的に宗教意識なるものは、人間に恵みや厄災をもたらす自然の背後に精霊や神の存在を見いだし、それを慰撫する呪術に始まる。やがて単なる精霊信仰はより思弁的な神々への信仰に置き換わり、神々との契約と言える約束事が創り出される。そこから神との約束であるタブーを犯すことによる罪の意識が生まれてくる。ところが丸山教授によれば、日本の原型的思考の第一の特徴は「厄災の観念と罪（人間の責任）の観念とが長期にわたって重畳していることである」。災いとはタタリであり、それから逃れるためにハライ、キヨメが行われるが、人間が犯す罪もまたケガレとしてハライ、キヨメの対象となる。罪も一種の厄災に他ならないという考え方である。確かにわれわれは今に至るまで、自然的厄災と人間的罪悪とを故意か不作為か混同して、個人の責任を厳しく追及しない癖がある。不祥事が起こった時、その原因を当事者の責任問題として追及するよりも、運が悪かったとあきらめて関係者一同がすべてを「水に流して」一件落着とするのが好きである。原型はみごとに生き続けていると言うべきであろう。

丸山教授はこの原型に導かれた古代日本人の世界像を「生成のオプティミズム」に貫かれたものとして特徴づける。「自然的生産力による生成と生育が生の本質であり、同時に価値の本源である」という思考様式が出発点になる。そこから引き出される善悪の捉え方は「生成・生育・生殖を促進する方向ないし作用活動」が善、逆にそれを阻害するものが悪という見方である。この発想は、神

と悪魔（善神と悪神）の二元的な対立から善悪を考える思想とは全く対立する。日本の思想は「成る」「生む」ものが善であるから、大切なのは時の流れであり、「成り行き」とか「いきおい」が重視される。勢いにあふれる行為は善であり、成り行きに逆らうことは悪となる。丸山教授は「状況そのものの中に生命がやどり、活動して動いている。それにわれわれは従わねばならない」という「この思考のなかには、主体的な選択の態度は見いだせない」と批判する。主体的な判断と人間的な決断の欠如（成り行き任せ）という原型は、現代にも息を吹き返して、例えば先の無謀な戦争を引き起こした指導者たちの行動にも現れている。

生成のオプティミズムは、しかし、われわれの「遊び」のなかには強靱に流れ込んで、遊びの特色を形作っている。万葉の遊びのイメージこそは、生成のオプティミズムそのものではないだろうか。適度な温度と十分な降水に支えられたこの列島の豊穡な自然は、古代人に生まれることと成ることの幸福を実感せしめた。自然は時として荒れ狂い、人に災いをもたらすこともあるが、しかし時を待てば必ず再び光と水が戻ってきて、木々は美しく花を付ける。人間はただそれを妻子を愛するように愛でればよいのだ。「美しい」という語と「愛しむ^{アイシム}」という語が同根なのは日本語の特色である。自然的な美と人間的な愛とは何の対立もなく通底している。人が恋しい、子どもをたくさん生み出せば、自然も負けじと田や畑に実が「成る」ように収穫を保障してくれる。自然

に身を任せ、自然の生成のエネルギーを出来うる限り人間の生の場に導入することがとりもなおさず「遊び」に他ならない。野山に遊んで花を愛で、歌い踊ってよき「をとめをとこ」と出会い、生きてある喜びを味わい尽くすことが遊びの神髄なのである。

遊びはまた「現在」を聖化する。いま・ここで、美しい時間と戯れ続けることが遊びであり、未来を慮って現在を犠牲にするのは遊びの精神に悖る。万葉人はすでに仏教を知っていたが、仏教の来世の思想はまだほとんど定着していない。先に大伴旅人の讃酒歌に見たとおり、現世の快樂こそが至上の価値であった。このことは貴族に列する旅人の歌ばかりでなく、民衆の歌である東歌にも通ずると加藤周一氏が指摘している。加藤氏の『日本文学史序説』では、東歌の背後に見いだされる土着文化の特徴として四点を上げている。第一に「感情生活の中心は男女関係であった」、第二に「民間信仰は、すべてその効果を、此岸に、しかも近い将来に期待するものであった」、第三に「人間関係を秩序づける原理は共同体内部の調和にあった」、そして第四に「時間の概念についてみれば、地方の大衆の世界は、すぐれて「現在」の世界であった」というのである。万葉人たちはこの世における遊び——男女の愛情を基盤に家族と部族の平和な生活を追求すること——を至上のものと考えた。彼岸を夢見ず、すべては此岸の、現在の営みに関心を集中した。万葉集には現在こそ善だという発想から詠まれた東歌が取り上げられている。

伊香保ろの傍ソイハリハラの榛原ねもころに将来オクをな兼ねマサカそ現在し善かば

(三四一〇)

懇ろに情を交わす二人は先のことなど考えない。二人の今こそ至福の時である。永遠の現在を夢見ることこそ遊びの本質なのである。遊びにおいて生のエネルギーが絶頂の高鳴りに到達する。そうした遊びの世界を古代人は列島の至る所に作り上げていたのであった。

三、王朝貴族の遊びの精神

平安時代になると、政治体制は安定し、京都の宮廷を活動の場とする貴族階級の存在が大きな位置を占めることになる。そして貴族たちの「遊び」のイメージは詩歌管弦の遊びが中心であった。

月のおもしろきに、夜更くるまであそびをぞし給ふなる

(源氏物語 桐壺)

ひとわたり遊びて琵琶弾き止みたるほどに (枕草子 八一段)
遊びは夜 人のかほ見えぬほど (枕草子 二一四段)

これらはみな琵琶を弾き笛を吹いて歌う音楽の遊びを意味している。音楽のたえなる調べは、ひとの魂を別の世界へ導いてくれる。

遊びにはそうした異次元体験を実現してくれる力が潜んでおり、楽器を弾きこなす技法によって、独自の音楽世界を構築していくのが平安貴族の好んだ遊びとなった。万葉の遊びが「自然との交感」を意味の核心に置いていたのに比べて、平安の遊びは（特に貴族階級において）「文化」への指向をより高めたと見ることもできるだろう。

歌についても大きな変化が現れた。前時代を象徴する『万葉集』と平安時代の到来を和歌において告げている『古今集』では、その歌の詠まれ方に大きな違いがある。このことについてはすでに大正年間に和辻哲郎が『日本精神史研究』の中でみごとに分析を行っている。純粋な叙情詩の時代であった万葉の時代に比べて、『古今集』の歌の特徴は、例えば春を歌うにしても「直感的な自然の姿ではなくして暦の上の春であり、歌の動機が暦の知識の上の遊戯に過ぎぬ」という点に看取される」と和辻は述べて次のような例を挙げる。

万葉の歌人は、せつかくの花を散らせてしまう春雨に対して

春雨はいたくな降りそ桜花いまだ見なくに散らまく惜しも

（巻十 春雑）

のように、単純明快に哀惜の情を述べるのだが、古今の歌人は

久方の光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ

（春下 紀友則）

と詠嘆する。かくものどかな春の日に、なぜに桜の花は落ち着いた気分もなく散ってしまうのだろう、という嘆きが歌われているのだが、和辻は「落花を惜しむ心を花に投げかけて心ざわしくと感ずることは『万葉』の歌人のなし得ないところであつた。」と指摘する。「本来相即したものである春日と落花とを、不自然に対立させるわざとらしさ」がとりもなおさず『古今』の新しさであり、そこに「概念の遊戯」として歌を詠むという新傾向が現れている。

（和辻哲郎『万葉集』の歌と『古今集』の歌の相違について）

万葉の歌人たちにとって「遊び」は自然のエネルギーを感じ取り、その美しさの中にわが身をそのまま投げ入れることであつた。歌はその遊びの表現として自ずから生まれて来た。ところが古今

の歌人は、彼らの観念の中にある自然のイメージに戯れ、そこに「わざとらしく」新たな見立てを持ち込んで歌を作ること遊んだのだと言える。自然的な遊びは、自然から距離を取って文化化されたのである。

平安貴族たちは「遊びの視点」から現実を切り取り加工して歌を詠むことを楽しんだ。同様に日常世界のさまざまな些事を遊びの視

やった気持。

本人にとつて恥ずかしくつて口クでもないことをさ、オクメンもなく喋つてるの！
(同九七段)

くちをしきもの↓くやしいもの。

準備して「早く早く」って待つてる事が、事情があつて急に中止になつちやつたの。

演奏だつてあるし見せたいこともあるんで、呼びにやつた人が来ないの——すつごくくやしい。
(同九八段、ここで「演奏」と訳されている原語は「あそび」である。)

千年の時を越えて清少納言の遊び心が現代のわれわれの感性の中に甦る心地のする翻訳だと思ふ。

四、遊びをせんとや生まれけん

平安貴族の遊びの精神とは別のところで民衆は別種の遊び観を保持していたのではないか。そのことを感じさせるのが『梁塵秘抄』の次の歌である。

遊びをせんとや生まれけん
たはぶれせんとやむまれけん

遊ぶ子どもの声聞けば
わが身さへこそ動がるれ

『梁塵秘抄』を編んだのは平安から鎌倉時代への過渡期に、平清盛、源頼朝と渡り合つたたかな帝王・後白河院。彼は装飾的、観念的な「遊戯」と化した和歌の世界に嫌気がさしたか、民衆歌謡を愛し、その収集に努めたばかりでなく、当時「今様」と呼ばれた流行歌の名高い作り手・歌い手であつた傀儡師の乙前を召して、帝王自らが歌を習得し修練に余念がなかつたという。今様は、現代の歌謡曲がそうであるように、民衆に愛された歌、いわば名もない民の心の表現だつたと言つてよいであろう。山折哲夫『歌』の精神史によると、『梁塵秘抄』の主要部分は法文歌、神歌と呼ばれる宗教的な歌群で、それらは親鸞の和讃にも連なる「法悦の歌」であつたという。この世の苦しみを逃れて成仏を願う心の歌と言ふべきか。

ところで『梁塵秘抄』の中には、子どもの遊びを歌つた童謡的な歌もいくつか散見される。なかでも「遊びをせんとや・…」の歌は子どもの遊びの楽しさ、輝かしさを歌い上げて余すところがない。まことに子どもたちは「遊びをせんと」してこの世に生を受けたのである。ふざけて騒ぎ回り、片時もじつとせずそこいら中を走り回る。その元気に満ちた、どこまでも透明な声を聞いていると、すでに疾うに子供時代を過ぎて分別くさい大人の生を生きている自分までもが、わけもなく感動させられてしまう。「動く」とは心が動

揺ることであり、子どもの遊び声の底抜けの明るさに引き込まれ、平衡を失って呆然とする、あるいは心の底から何かがかみ上げられてきて、橋本治風に訳せば「じーんと来ちゃう」のである。

平安の民衆が子どもの遊びの中に感じ取った生命の輝きは、はるか後世のヨーロッパでフレーベルが子どもの中に発見した善なるものと同質ではなかったか。「遊戯は、この段階の人間の最も純粹な精神的所産であり、同時に人間の生命全体の、人間およびすべての事物のなかに潜むところの内的なものや、秘められた自然の生命の、原型であり、模写である」。フレーベルが『人間の教育』の中で語るこの一節を詩の形で示したのが「遊びをせんとや」の一句である。そこには子どもたちが代表する、自然の生命の永遠の明るさが示されるとともに、そこから一線を隔てざるを得ない大人である「わが身」の世界、つまりは世間の重さと暗さとが深い諦念とともに描かれている。

(参考文献)

- 『記紀歌謡集』 岩波文庫
『万葉集 上下』 岩波文庫
『枕草子』 岩波文庫
和辻哲郎『日本精神史研究』 岩波文庫 一九九二年
加藤周一『日本文学史序説上』 筑摩書房 一九七五年

『丸山眞男講義録』〔第四冊〕 東京大学出版会 一九九八年

橋本治『桃尻語訳 枕草子 上中下』 河出書房新社

フレーベル『人間の教育』 岩波文庫

山折哲夫『歌』の精神史』 中央公論社 二〇〇六年

『岩波古語辞典』 岩波書店